

東大キャンパス歴史散歩 Map



めぐろ EYE'S

Vol.10



編集・発行
めぐろ観光まちづくり協会

〒153-0051 東京都目黒区上目黒2-1-3 中目黒 QT 地下1階
TEL:03(5722)6850 FAX:03(5722)6891 E-mail:stanf@meguro-kanko.com
<http://www.meguro-kanko.com>

取材協力: 東京大学 大学院総合文化研究科・教養学部 駒場博物館
写真提供: 東京大学駒場博物館
: 東京大学大学院農学生命科学研究科
生物・環境工学専攻 農地環境工学研究室
: 目黒区

☎03-5722-6850 E-mail : meguro@meguro-kanko.com



きつなし、きつなされて
楽しむところが
めぐろ EYE'S
Vol.10

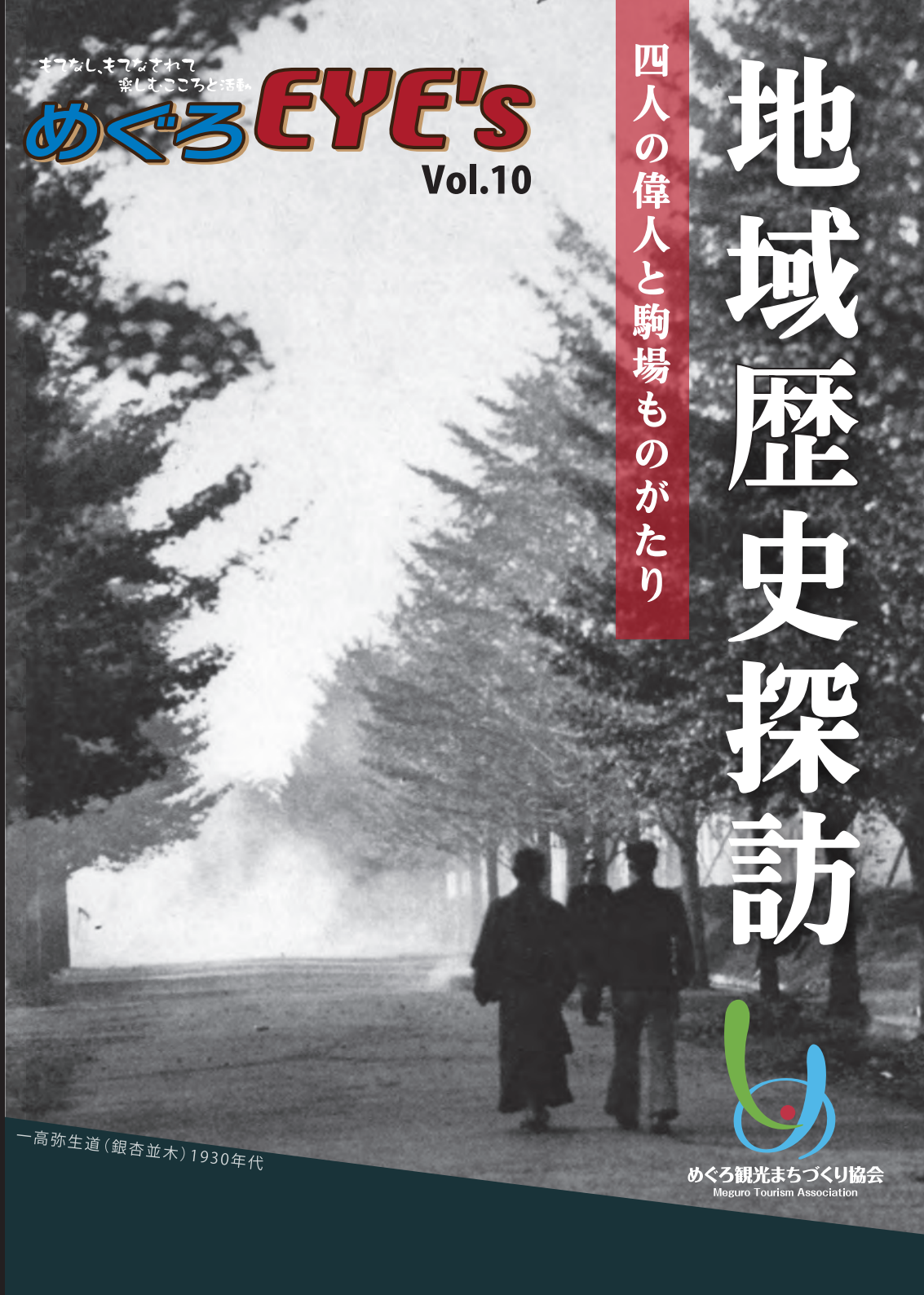
四人の偉人と駒場ものがたり

地域歴史探訪



めぐろ観光まちづくり協会
Meguro Tourism Association

一高弥生道(銀杏並木)1930年代





土地に歴史あり、
歴史に人物あり

「それはいかん。サンマは目黒に限る」
殿様のそんなセリフでオチがつく、
落語噺『目黒のサンマ』。殿様がそう
言ったのは、目黒に鷹狩りに来た時
たまたま食べたサンマが美味だった
から。江戸時代、徳川将軍家の娯楽
だった鷹狩りの場＝鷹場は江戸郊外
にいくつかあり、目黒の駒場もその
ひとつでした。

今では東京大学の学生たちが学ぶ
場として知られる駒場。ここに至るには
幾度かの変遷があり、それぞれの時代
を築いた偉人たちがいました。歴史と
人物をひもときながら、駒場散策に
出かけませんか。

四人の偉人と 駒場ものがたり

「江戸名勝図会 駒場野」
国立国会図書館所蔵

● 駒場キャンパスの変遷

- 明治11年(1878年) 駒場農学校開設
- 明治19年(1886年) 東京山林学校と合併し東京農林学校に
- 明治23年(1890年) 東京農林学校が帝国大学に合併し
帝国大学の分科大学として農科大学が創設
- 明治30年(1897年) 帝国大学を東京帝国大学と改称し
農科大学を東京帝国大学農科大学と改称
- 大正8年(1919年) 東京帝国大学農学部となる
- 昭和10年(1935年) 校地交換により第一高等学校が来る
- 昭和24年(1949年) 東京大学教養学部設置
- 昭和25年(1950年) 第一高等学校終焉

● この人物に注目！

- オスカー・ケルネル (P2)
- 上野英三郎 (P2)
- 森巻吉 (P3)
- 矢内原忠雄 (P4)

駒場の偉人 一 今なお稲が実る田圃に名を冠す オスカー・ケルネル (Oskar Kellner 1851-1911)



江戸幕府に代わって誕生した明治新政府
は、各分野で西洋技術を取り入れた近代化
に力を注ぎました。そんな中、かつて鷹場
だった駒場につくられたのが「駒場農学
校」。農業・畜産に関する日本初の総合教育
研究機関として、明治11年(1878年)に開校
しました。

井の頭線「駒場東大前」駅から線路沿いを
西へ進むと見えてくる「駒場野公園」、ここ
も、駒場農学校の跡地の一部。中に入ると、
「ケルネル田圃」があります。駒場農学校時
代、日本で初めて水田での肥料試験が行わ
れたこの田圃にその名を残す人物が、今回
ご紹介する駒場の偉人の一人目。

明治14年(1881年)、駒場農学校開校3年目
にドイツから農芸化学の教師として招かれ
たオスカー・ケルネル。彼は、水田土壌の研
究と稲作肥料の研究に多大な業績を残し、
駒場農学校の後身である東京農林学校、帝
国大学農科大学を通じて、明治25年(1892
年)に帰国するまでの11年にわたり日本の
農業教育に尽力。その後の日本近代農学の
発展に大きな役割を果たしました。

今でも「ケルネル田圃」では、筑波大学付
属駒場中学・高校の学生たちにより稲作が
行われており、オリジナルの創作かかしの
出来栄を競うかかしコンクールも30年
以上前から毎年ここで開催されています。

駒場の偉人 二 ハチ公の主人は農業土木の第一人者 上野英三郎 (Hidesaburo Ueno 1871-1925)



渋谷駅の待ち合わせ場所としておなじみ
の、ハチ公。その“忠犬ぶり”は、映画や絵本な
ど数々の作品で描かれてきましたが、ハチ
公が待ち続けた飼い主のことは、ご存じで
しょうか。

ハチ公の主人は、駒場にあった東京帝国
大学農学部の教授、上野英三郎。かつてケル
ネル氏が活躍した駒場農学校は、明治19年
(1886年)に東京山林学校と統合され「東京
農林学校」となり、これが明治23年(1890年)
に帝国大学と合併して「農科大学」に、さら
に大正8年(1919年)帝国大学令の改正によ
り「東京帝国大学農学部」となりました。

上野教授は、農科大学時代から駒場で教
鞭をとり、農業土木、特に田圃に必要な用水

をどう引くかについて研究し、その分野で
第一人者と呼ばれました。一方、農商務省兼
任技師として耕地整理技術者の養成にも尽
力。彼に指導を受けた技術者たちは大正12
年(1923年)関東大震災後の復興事業にも貢
献しました。

上野教授の自宅は渋谷駅の近く(現在の
松濤あたり)にあったため、教授が電車を出
かける時は渋谷駅までお見送り・お迎えを
していたハチ公。教授が歩いて駒場の大学
に行くときは、やはり大学の門までお見送
り・お迎えをしていました。亡くなったとは
知らず主人を10年も待ち続けたハチ公は、
その間、渋谷駅だけでなく駒場へも迎えに
行っていたのかもしれないね。

駒場の偉人 三 森 卷 吉 (Kenkichichi Mori 1877-1939)



駒場に移転してきた一高の校長

東京帝国大学は総合大学としての整備を行うため、駒場の農学部を本郷に移すことを希望し、昭和10年(1935年)、それまで本郷にあった第一高等学校(一高)と農学部の校地を交換。駒場は一高のキャンパスとなりました。

一高が駒場に移転した当時の校長が、森卷吉。昭和4年(1929年)一高校長に着任した森卷吉は、校地移転に反対意見などもある中で校長として見事に人々をまとめ、昭和10年(1935年)に無事駒場への移転を実現させました。移転当日は、森

校長が先頭に立ち、職員・生徒たちを率いて本郷から駒場まで徒歩で武装行進を敢行。そんな熱血漢ぶりは生徒たちからも慕われ、「モリケン」の愛称で親しまれていました。

森卷吉は、東京帝国大学英文学科の学生だった頃、小泉八雲や夏目漱石の講義を受けました。卒業後、一高に清国官費留学生の英語教師として招かれますが、これも漱石の口添えによるものと言われます。漱石と卷吉との師弟関係は、漱石が亡くなるまで続きました。



移転式出勤前



夏目夫妻と森夫妻

東京大学駒場キャンパスには、現在も一高時代の建物が残されています。正門や時計台のある1号館、駒場博物館(旧図書館)や900番教室(旧講堂)などなど。それら一高関連の建物を見るとき、注目すべきポイントがあります。

それは、「柏」と「オリーブ」。一高は、ローマ神話の軍神マルスの「武」を象徴する柏葉と、女神

ミネルヴァの「文」を象徴するオリーブをモチーフにした校章を用いていました。一高の文武両道の精神を表すこの紋章は、今も正門の大扉に透かし模様として掲げられています。つまりこの正門は一高時代に作られたものなのです(現在のものは復元)。

他にも柏とオリーブのモチーフがあちこちに。ぜひ探してみてください。

柏とオリーブ

駒場東大秘話

学生を救った 門 矢内原

矢内原忠雄が駒場で教養学部長を務めたのは、2年。その後は東京大学総長として駒場を離れることになるのですが、この2年間に、ある事件が起きました。

一部の学生による試験ボイコットです。その時、正門が封鎖され通行できなくなってしまいました。しかし学生の中には、試

験を受けたい者もいます。そこで矢内原は、彼らのために正門以外の通路から学内に入ることを特別に許可しました。

矢内原の粋な計らいは後々まで語り継がれ、その通用口はいつしか「矢内原門」と呼ばれるようになりました。近年のキャンパス整備事業のため現在その門はありませんが、跡地に石碑が設置されています(次ページ参照)。

駒場東大秘話

駒場の偉人 四 東大教養学部の初代学部長 矢内原 忠雄 (Tadao Yanaiharu 1893-1961)



戦後に施行された学校教育法により、それまでの旧制大学や旧制高等学校などは4年制の新制大学として再編されました。そんな中、一高は新制東京大学に包括され、駒場には新たに東京大学教養学部が設置されました。

その初代教養学部長として抜擢されたのが、矢内原忠雄。彼もやはり学生時代は一高で学び、卒業後は東京帝国大学法科大学へ進学、後に同大学の経済学部で植民地経済の研究(植民政策学)を行うこととなります。

彼は一高の学生だった頃、校長の新渡戸

稲造や、所属していた聖書研究会の主催者である内村鑑三などに多くを学び、キリスト教への信仰を深めていきました。この矢内原の信仰と学問は、満州事変や日中戦争、太平洋戦争といった時代の動きを批判する形を取り、昭和12年(1937年)には教授の辞任を余儀なくされました。

それでも自らの信念に基づき平和を訴え続けた矢内原は、終戦後にふたたび東京帝国大学に復帰。そして駒場に誕生した東京大学教養学部の初代学部長となったのです。



東大キャンパス歴史散歩

東京大学駒場キャンパスは、近隣の人たちの散歩道として愛されています。四季折々の自然の風景のなかに、大学が歩んできた歴史の面影を見つけることができます。みなさんも、井の頭線「駒場東大前」駅を降りてすぐの異世界を散策してみませんか。

今

1 正門・1号館(旧一高本館)

東京大学駒場キャンパスの象徴である正門と1号館は、一高時代の建造物。正門の大扉には柏とオリーブをモチーフにした一高の校章の透かし彫りが見られます。登録有形文化財となっている1号館は、当時教室のほか職員室や校長室も置かれていました。現在もここで授業が行われています。



昔



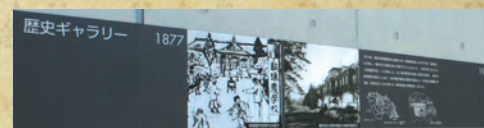
5 農学部マンホール

東京帝国大学農学部時代に使われていたマンホール。「農学部・計量器」の文字が刻まれています。現在はマンホールとしては機能していませんが、付近の石畳を張り替える際に、記念としてひとつだけ残されました。



6 「歴史ギャラリー」パネル

駒場農学校時代からの駒場キャンパスの変遷を、当時の貴重な写真や図面とともにわかりやすく解説したパネルが、駒場コミュニケーションプラザの壁面に貼られています。歴史散策するなら、まずはここをチェック。



2 駒場博物館(旧一高図書館)

一高時代に図書館として使われていた建物を、2003年に改修し「駒場博物館」として美術博物館と自然科学博物館を併設。様々な展示会を開催するほか、一高時代からの貴重な資料なども保管。建物の正面には、文武の「文」を象徴するオリーブをモチーフにした紋章が掲げられています。



昔



今

7 900番教室(旧一高講堂)

旧一高図書館とそっくりな姿で向かい合うように建つ900番教室は、一高時代の講堂。建物正面に掲げられた紋章は、旧一高図書館とは対照的に文武の「武」を象徴する柏がモチーフ。中にはパイオルガンがあり、定期的に無料演奏会も開かれています。



昔



3 ファカルティハウス(旧一高同窓会館洋館)

一高の同窓会が1937年に建築。2004年に研究者交流施設「ファカルティハウス」となり、1階に「ルヴェゾンヴェール駒場」、2階に「橄欖(かんらん)」と2つのフレンチレストランが。これらは一般の方も利用可能です。ちなみに橄欖とは、オリーブのこと。中庭には、一高の寮歌を刻んだ「嗚呼玉杯之碑」、一高で教鞭をとった外国人教師のブロンズ像もあります。



昔



8 矢内原門跡

前ページで紹介した、東京大学教養学部の矢内原学部長が試験を受けたい学生のために通行を許可した通用口跡。通称「矢内原門」として学生たちの間で語り継がれ、1996年に石碑が建てられました。付近は矢内原公園と呼ばれています。



4 駒場農学碑

東京帝国大学農学部が一高と校地を交換した翌年の1936年、駒場が農学発祥地であることを後世に伝えるために建てられました。すぐ近くには、駒場農学校からの経緯を記した碑文石もあります。



9 銀杏並木

現在、東京大学駒場キャンパスのシンボルと言える銀杏並木は、駒場農学校時代から敷地内のメインストリートとして存在していました。銀杏が植えられたのは、東京帝国大学農学部時代。一高時代には、校地交換する以前の本郷の住所、向ヶ丘弥生町にちなみ「弥生道」と呼ばれました。